「分業」および「分業の廃棄」について〔I〕

——研究ノート——

中　野　雄　策

まえがき

発展した共産主義の社会と経済を特徴づける標識としては、たとえば、「高度の生産力とありあまる富」であるとか「生活の第一欲求としての労働」であるとか「単一の共産主義的所有」であるとか「都市と農村との対立の揚棄」であるとか「商品・貨幣関係の克服」であるとか「階級（したがって政治的国家）の死滅」であるとか「普遍的に発達した人間」であるとか、等々……さまざまのものがあげられている。しかし、これまでのところ、これらの標識を全体として斉合的にとらえる努力は必ずしも成功してはいない。このばあい、個々の標識のあいだの因果関係を追うにとどまるならば、おそらく迷路にふみこむことになろう。なぜなら、これらの標識は、それぞれが他のすべてをそれなりに説明しうるほど包括的な内容をもっているからである。「高度の生産力」が創出されなければ、農業を工業化することもできないし、都市と農村との社会経済的差異はなくならないし、直接社会化された単一の共産主義的所有を創設することもできない。また「ありあまる富」が現存しないうちは、分配原則の転換も商品・貨幣関係の最終的克服も達しがたいであろう。しかしまた、多面的な物質的・精神的生産にたずさわる普遍的に発達した個人こそが、生産においても分配においても、つねに主体として前提されるであろうし、さらにまた、こうした普遍的個人そのものが共産主義的に組織された社会生活全体の固有の申し子なのである。

いずれにしても、資本主義から共産主義への体制的転換、「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」から「それ自身の土台のうえに発展した共産主義社会」への漸進的移行の課題が、社会主義世界において実践的に提起されている今日、共産主義的社会体制についての本質的・科学的認識にもとづいて移行過程の合則性を明らかにすることは、はなはだ興味ある（また現実的な）仕事となっている。もちろん、このような問題の十分な学問的解明は、それが実践的に解決されてゆく世界史的現実を背景としてのみ果しうるし、それ自体が共産主義の経済と社会と人間にかんする一般理論を構築するという史的

唯物論の新たな課題に直接つながる大きな仕事なのであって、ソ連邦をはじめとする社会主義世界の今日の諸科学が全体としてエネルギッシュにとりくんでいる仕事なのである。筆者の課題はただ、こうした包括的問題にたいして「共産主義と分業の廃棄」という周知のテーマにかかわる側面から（とはいっても、筆者にはこの側面こそ決定的と思われるのだが）アプローチするために、いくつかの問題点を指摘することだけである。

1. マルクスにおける問題の提起

共産主義的に組織された社会と経済の一般的本質にかかわるものとしての「分業の廃棄」という思想は、初期のマルクス(およびエンゲルス)において、新しい歴史主義的世界観が形成されると同時に、はなはだ鮮明にのべられている。「ドイツ・イデオロギー」（1845〜1846）から2つだけ引用しよう。

「……各人がどんな排他的な活動範囲をもつことがなく、どんな任意の部門ででも腕をみがくことができる共産主義社会にあっては、社会が全般の生産を規制し、まさにそのことによって私に、今日はこれ、明日はあれをする可能性を与えてくれる。つまり狩人、漁師、牧者または批判者になるなどということなしに、私の気のおもむくままに、朝(あした)には狩りをし、午(ひる)すぎには魚をとり、夕(ゆうべ)には家畜を飼い、食後には批判をする可能性である。」[1]

「共産主義的社会組織にあっては、芸術家をまったく分業から生ずる地方的また国民的な限られた枠内に入れるとか、個人を特定の芸術の枠内に入れてその結果個人がもっぱら画家、彫刻家等々であり、すでにその名称が彼の仕事のうえの発展の偏狭さと彼の分業への依存とを十分に表現しているようなこととかは、いずれにしてもなくなってしまう。共産主義社会においては、画家などというものはいなくて、せいぜい、他にもいろいろすることがあるが、なかんずく絵を描くこともする人間がいるだけである。」[2]

ここでは、共産主義的に組織された社会では、物質的生産においても精神的生産においても、個々人の生活を「社会的に固定化」したり、「地方的・民族的・職業的せまくるしさ」のうちにとじこめたりすることがなくなるという意味での「分業の廃棄」が、疑問の余地なくのべられている。

「ドイツ・イデオロギー」から「哲学の貧困」「共産主義の原理」（1847）にいたるごくわずかの期間は、生産関係範疇の確立によって新しい歴史主義的世界観がほとんど完成されるにいたった時期であるが、このことは、のちにのべるように、マルクスにおける分業概念のうえにかなり重大な影響を及ぼした

とみとめられる。しかもなお、「貧困」や「原理」のうちには、共産主義と「分業の廃棄」との不可分の連関にかんする思想が、いっそう明りょうにのべられているのである。

エンゲルスは、「共産主義の原理」のなかで、共同的・計画的に経営される共産主義的産業が、「あらゆる面に素質の発達した、生産の体系全体を見とおせる人間」[3]を前提するとのべつつ、「ひとりが農民に、つぎが靴屋に、第3のものが工場労働者に、第4のものが株式の投機屋になるというような、もういまでも機械によってくずれている分業は、したがってまったくなくなるだろう[3]」と予想している。ここではすでに、資本主義社会の内部で、しかも直接的生産過程の内部で分業体系を現実にほりくずしつつある物質的条件(機械)にたいする認識がみられるのであるが、マルクスが「哲学の貧困」において、分業法則を永遠化するプルードンを批判しつつ、とくに強調してのべたのも、人間労働にたいする機械体系の革命的役割にかんする同様の思想であった。「自動機械工場における分業を特色づけるものは、そこでは労働が特殊的な性格をすべて失ってしまっている、ということである。しかし、すべての特殊的な発展が停止するとき、いちはやく、普遍性の欲求が、個人の全般的発展をめざす傾向が、感じとられはじめる。自動機械工場は特殊専門人と職業白痴を一掃するのである。」[4]

労働の人為的分割にたいする機械体系の致命的影響、したがって分業労働と工場労働との技術的非両立性というこの思想が、のちに「資本論」(第1巻、第13章)においてみごとに展開され論証されたものであることはいうまでもない(この点はのちにふれる)。さしあたりここでは、マルクスおよびエンゲルスにおいて、共産主義のもとでの分業一般の消滅の思想が、分業概念にたいする理解のうえに若干の変化がみとめられるにもかかわらず、最後までけっして放棄されなかったことを示すために、なお2つの引用を加えておく。

1877年に、エンゲルスは、「労働の価値」とか「価値の価値」とかの非科学的な原理から出発して「将来の生活資料の分配をより高度の労賃として規制しようとする」[5]デューリングに反対して、共産主義的分配を「すべての社会成員にたいしてその能力をできるだけ全面的に発達させ、保存し、発揮することができるようにさせる分配様式」であると規定し、さらにこれに関連してつぎのようにのべている。「ところが、職業的荷車ひきも建築技師もなくなるときがくるであろうということ、したがって半時間は建築技師として指図していた人が、建築技師としての活動がふたたび必要となるまで、しばらく荷車をひく

こともあるということは、……有識階級の考え方にとっては、たしかにとほうもないことだと思われるにちがいない。職業的荷車ひきを永遠化するうるわしい社会主義よ！。」[5] また「哲学の貧困」ドイツ語第1版への序文（1884—エンゲルス）のなかには、つぎのような章句がみられる。「労働者が自己の生産物の全価値を自己の消費のためにうけとりうるような社会状態などは存在しえない。生産されたフオンドは、経済的には不生産的ではあるがしかし必要な多くの職能に必要な費用をまかなわなければならない、したがってそれらの職能に関係している人々をやしなわなければならない。〔といっても〕このことは、現在の分業が価値あるものであるかぎりでのみ真実なのである。全般的に生産的労働をやることが義務的となるような社会—こういう社会はありうるのだが—においては、このような考察は通用しない。〔このような社会においても〕なお、社会的予備基金と社会的蓄積基金との必要が依然として存続するであろう。そしてこの場合には、労働者たち、すなわちすべてのものが、彼らの生産物全体を所有し享有するであろう、しかし孤立した個々の労働者が彼の労働の全生産物を享有するわけではないであろう。」[6] 要するに、生産的労働への全般的参加ということがすでに、生産部面と非生産部面への社会の分裂と両立しえないし、生産的労働者と不生産時労働者との分業関係の否定のうえにしか実現されない、という意味で、「現在の分業」は価値を失うのである。

共産主義の本質の消極的表現として、初期マルクスにおいて提示された疎外原理（経哲手稿）や「分業廃棄」の思想（ドイツ・イデオロギー）を、レーニンがどのように理解していたかを知る材料はほとんどないといってよいだろう。レーニンが、これらの文献に接しなかったことは確実であるし、その意味を看過するわけにはいかないが、問題はむしろ、レーニンにおいては、来るべき未来についてのわかりやすい実践的解説こそが重要であり、そのさい「真の社会的平等」とか「階級の廃止」とかの「フランス的つまり政治的形式」[7] をかりて「共産主義の政治的根拠づけ」[7] を与えた、という点にあろう。しかし、それとともに、レーニンにおいては、新しい労働の性格と形態（土曜労働）のうちに共産主義の萌芽を求め、共産主義的労働を新しい社会組織の「細胞」[8] とよび、社会的労働の共産主義的組織を創出する仕事をもっとも重要な課題としてくりかえし強調している点にみられるように、共産主義の本質をまずもって主体の側から、人間の側から把握しようとする志向がはっきりみとめられる。レーニンにおいて社会的労働の共産主義的組織がどのようなものとして考えられていたかは、もちろんそれ自体きわめて大きなテーマである。た

だ、それが、かれ自身「分業の絶滅」(уничтожение разделения труда) とよんだものを本質的契機としていたことは、つぎの引用によって十分明らかであろう。

「資本主義は、かならず一方では、社会主義への遺産として、労働者のあいだの古い何世紀もかかってできあがった職業や職種のうえの差異をのこし、他方では労働組合をのこすものである。労働組合は非常にゆっくりと、長い年月をかけてはじめて、より広い、同職組合的性質のうすい産業別の組合（ある職場、ある職種ばかりでなく、全産業をふくんで）に発展することができるし、また発展するであろうが、そのあとで、この産業別組合を通じて、人々のあいだの分業をなくすこと、どの方面の知能も発達した、あらゆる面の訓練をうけた人々、なんでもすることのできる人々を教育し、訓練し、養成することへ移ってゆくことができるし、また移ってゆくであろう。共産主義は、それをめざしており、まためざさなければならず、そしてそれに達するであろう。」[9)]

1）K・マルクス、F・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」、マルクス＝エンゲルス全集、第3巻、大月書店、1963年、29ページ。
2）同、424～425ページ。
3）F・エンゲルス「共産主義の原理」、同、第4巻、1960年、392～393ページ。
4）K・マルクス「哲学の貧困」、同、163ページ。
5）F・エンゲルス「反デューリング」、マルクス＝エンゲルス選集、第14巻、大月書店、1950年、357ページ。
6）同、「「哲学の貧困」ドイツ語第1版への序文」、同、第1巻、1952年、477ページ。
7）K・マルクス「経済学・哲学手稿」、大月書店、国民文庫、1963年、175ページ。
「平等とは、ドイツ的な「自我＝自我」がフランス的つまり政治的な形式に飜訳されたものにほかならない。共産主義の根拠としての平等は、共産主義の政治的根拠づけであって、ドイツ人が人間を普遍的な自己意識と解することによって自分に共産主義を根拠づけるばあいと同じものである。」
8）B・レーニン「偉大な創意」、レーニン全集、第29巻、大月書店、1958年、429ページ。
9）同、「共産主義内の「左翼主義」小児病」、同、第31巻、1959年、32ページ。

2. 問題状況および文献

前節でのいくつかの引用から確認されることは、共産主義社会と「分業の廃棄」との不可分の連関の思想は、マルクス主義的世界観の形成とともにうち立

てられ、マルクス主義の発展と成熟の過程において、この思想の比重に変化があったかなかったかは別として、とにかくけっして放棄されることはなかったということである。こうした確認が前もって必要な理由は、従来、ソ連邦においてはもちろん、一般にこの思想がほとんど無視されるか、無視されないまでもはなはだ軽く（ときにはたんなる比喩として）扱われる傾向があったからである。この傾向を生み出した最大の原因としては、初期マルクスの本格的研究の日が浅いことを別とすれば、おそらく、スターリンによるこの問題の矮小化をあげることができよう。スターリンは1935年にすでに、「分業の廃棄」という問題を精神労働と肉体労働との対立を絶滅する問題に限定して扱い、しかも問題の核心を主として労働者の文化的・技術的水準を技師・技手のレベルにまで引上げる問題におしこめてしまったのであるが[1]、1952年になると、さらに問題を限定して、精神労働と肉体労働との差異の解消は「本質的差異の絶滅」のことであって「本質的でない差異はそのままのこる」という形に訂正してしまったのである[2]。「個人崇拝」時代にあらわれた「分業」および「分業廃棄」問題にたいするこのような軽視の傾向については、C．ストルミリンもまた証言しているところであるが[3]、なによりもまず今日のソ連邦における経済学や社会学の教程類に痕跡をのこしているのである。一例をあげるなら、科学アカデミー経済研究所の「経済学（教科書）」の最新版（1962）には、つぎのようにのべられている。「古い分業がとりのぞかれるということは、あらゆる分業がなくなり、さまざまな職業のあいだや、生産、科学、文化のさまざまな分野のあいだのあらゆる差異がなくなることを意味するものではない。共産主義のより高い段階においても……労働のうえでの差異、たとえば冶金技師、農業技師、運輸の働き手、学者、作曲家、芸術家などの労働のうえでの差異がのこるであろう。」[4] なるほどここでは、旧版にあったような「共産主義的分業」という言葉は注意ぶかくさけられてはいるが、しかしのべられているのはいぜんとして分業一般（したがって職業的分業）を事実上永遠化する思想である。これは、「職業的荷車ひきを永遠化するうるわしい社会主義」とどの点で区別されるのだろうか？それとも、芸術家を「職業的せまくるしさ」から解放しようとしたマルクスは、ユトーピアンだというのだろうか？

「分業の廃棄」あるいはもっとポジティブにいうならば「普遍的個人の形成」というような共産主義にとっての本質的問題にたいする従来みられたような安易な常識の域をでない理解にたいして、マルクス主義の権威ある文献にふ

くまれる前述の疑う余地のない思想を復位させるべく最初のショックを与えたのは、多分ストルミリン[5]であったと思われる。かれは、共産主義のもとでの「分業の廃棄」の意味を、人間の分業から機械の分業への移行という点に求めた。つづいてД・カイダロフとB・コルニエンコが、いくらかちがった観点から同様の主張をくわしく展開した[6]。前者は、分業と生産専門化との概念的区別から、後者は、労働分割と生産分割との概念的区別から、それぞれ共産主義と分業との非両立性を結論した。また、B・エリメエフ、B・パローゾフ[7]も同様の見解を詳細に論じたが、こうした議論を背景として、1962年以来、「哲学の諸問題」および「経済の諸問題」誌（いずれもソ連邦科学アカデミー）は、この問題をとりあげて誌上討論を組織するにいたった[8]。広汎な哲学者（社会学者）、経済学者の参加したこの誌上討論において議論の中心に立ったのはいぜんとしてストルミリンであり、かれの見解は新たに何人かの支持者をえた[9]。しかし、討論参加者の多くは「分業の廃棄」を文字どおり理解することには批判的であり、その結果、「哲学の諸問題」誌の中間総括（注⑽参照）では、「共産主義的分業」の存在をほぼ承認することになっている。なお「経済の諸問題」誌は、たんに意見の不一致を確認するにとどまっている（注⑾参照）。以上が、ソ連邦における問題状況の概略である。

1）См. И. Сталин, Вопросы Ленинизма, 11оеи3д. стр. 533～534.

2）同、「ソ連邦における社会主義の経済的諸問題」、大月書店、国民文庫、1953年、ページ参照。

3）См. С. Г. Струмилин, Коммунизм и Разделение труда, Вопросы Философии, No. 3, 1963, стр 37.

4）Политическая экономия (Учебник), Четвертое, переработанное и дополненное издание, 1962, стр 669. 邦訳、「経済学教科書」改定増補第4版、合同出版社、1963年、1026ページ。

5）См. С. Г. Струмилин, На путях построения коммунизма, 1959, стр 8～13 ; Проблемы социализма и коммунизма, 1961, стр 293～297.

6）Д. Кайдалов, Коммунизм, труд и человек, 1960 ; Разделение труда в настоящем и будущем, Вопросы экономики, No. 9, 1961.

В. Корниенко, Общественное разделение труда в период перехода к коммунизму, 1963.

7）В. Ельмеев и В. Полозов, Вестник Ленинградсткого университета, No. 17, вып. 3, 1962. なおB. エリメエフおよびB. パローゾフは、さいきんこのテーマにかんする下記のような体系的な著作をあらわしている。

В. В. Ельмеев, Коммунизм и развитие человека как производительной силы общества, 1964, 300 стр.

В. Ельмеев, В. Полозов, Б. Рященко, Коммунизм и преодоление разделения между умственным и физическим трудом, 1965, 144 стр.

8）両誌所載の討論文献はつぎのとおり。

А. Курылев, Разделение труда и всестороннее развитие личности в период перехода от социализма к коммунизму ; В. Ельмеев, Всестороннее развитие личности предполагает уничтожение разделения труда между людьми ; П. Маслов, Правильное умственного и Физического труда—условие всестороннето развития личности ; Е. Маневич, Социально—экономические основы всестороннего развития личности при коммунизме ; И. Кураков, Всесторонне развитый человек—высокопроизводительный работник ; А. Андреев и Я. Тимошков, Разделение труда и общественные группы при коммунизме ; М. Бобнева, Вопросы《интеллектуализации》труда, Вопросы философии, No. 10, 1962.

С. Струмилин, Коммунизм и разделение труда ; Н. Новоселов, Разделение труда при коммунизме не исключает возможности перемены труда и всестороннего развития личности ; Г. Козлова и З. Фаинбурт, Изменение характера труда и всестороннее развитие человека, Вопросы философии, No. 3, 1963.

В. Сухомлинский, Труд—основа всестороннего развития человека, Вопросы философии, No. 4, 1963.

Г. Шеменев, Связь науки с производством и всестороннее развитие личности ; В. Белозерцев и В. Фомина, Коммунистическое разделение труда не иеключает всестороннего развития человека, Вопросы Философии, No. 9, 1963.

Н. Колубабов, Р. Косолапов и И. Россман, Сокращение рабочего времени, перемена труда и всестороннее развитие личности ; Ким Сергеев, Останутся ли професии при коммунизме ? ; Л. Ваинштейн, Тенденции разделения личности при социализме и коммунизме, Вопросы философии, No. 11, 1963.

Э. Стригачева, Физическое совершенство—неотемлемая черта всесторонне развитой личности, Вопросы Философии, No. 12, 1963.

Н. Хайкин, Подготовка работников широкого профиля—один из путей формирования всесторонне развитой личности, Вопросы философии, No. 1, 1964.

С. Струмилин, О. разделение труда при коммунизме, Вопросы экономики, No. 11, 1963.

Е. Маневич, К вопросу о разделении труда при коммунизме, вопросы экономики, No. 1, 1964.

9) ストルミリンの見解を完全に支持するか、あるいは多少とも近い見解をのべたのは、前記のエリメエフ、パローゾフ、コルニエンコ、カイダロフのほかに、Г. シェメネフ、К. セルゲエフ、Л. セメノフ、А. クドリャフツェフ、Д. メーリニク、И. スード、А. ロヂーギンである。

10) К дискуссии о разделении труда и всестороннем развитии личности, Вопросы философии, No. 6, 1964.

11) О разделении труда при социализме и коммунизме, Вопросы экономики, No. 7, 1965.

12) 上記のもの以外の主要な関係文献をあげておこう。

Г. Смирнов, Разделение труда и обмен деятельностью в системе производственных отношений, Вопросы Философии, No. 5, 1958.

В. Немченко, Коммунизм и разделение труда, Политическое самообразование, No. 8, 1960.

Е. Маневич, О ликвидации разделении между умственным и физическим трудом в период развернутого строительства коммунизма, Вопросы философии, No. 9, 1961.

И. Сигов, К вопросу о сущности разделения труда и его месте в системе общественного производства, Научные труды Ленинградского института точной механики и оптики, вып No. 52, 1961.

А. Курылев, Всестороннее развитие личности при коммунизме, Вопросы Философии, No. 10. 1961.

Г. Грезерман, Коммунизм и труд, 1961.

А. Зворыкин, Труд и технический прогресс, Вопросы экономики, No. 10, 1961.

В. Комаров, и В. Москович, Об общественном разделении труда как экономической категории, Проблемы политической экономии социализма, 1961.

П. Юдин, От социализма к коммунизму, 1962.

А. Курылев, Преодоление существенных различий между умственным и физическим трудом—проблема строительства коммунизма, 1963.

И. Судеревский, Проблемы разделения труда, 1963.

А. Попов, Автоматизация производства и разделение труда, Экономические науки, No. 5, 1964.

3. 分業（あるいは社会的分業）とは何か？

共産主義の一般的本質を消極的に示すものとしての「分業の廃棄」とは一体何を意味するのか、という問題を解明するためには、前もって「分業」とは何かが明らかにされていなければならない。ソ連邦における論争の行きづまりが示すように、分業概念のカテゴーリッシュな（したがってだれにも異論のない）規定が欠けている点にこそ共産主義のもとでの分業の運命についての理解が分れるそもそもの理由があるのである。だからもし、この点で一致しておれば、共産主義的労働組織にたいして分業概念を適用しうるか否かはほとんどターミノロギーの問題になってしまうともいえるのである。

§1 マルクスにおける分業概念の変せん

マルクスにおける分業概念は必ずしもつねに首尾一貫したものではなく、また一義的なものでもない。「ドイツ・イデオロギー」に代表される初期の分業概念と「資本論」にみられる分業論とのあいだにはたしかに若干の変化がみとめられる。生産関係範疇の確定されていなかった「ドイツ・イデオロギー」段階においては、分業概念ははなはだ広汎な内容を与えられ、生産関係的性格のつよい概念として理解されていたようである。そこではまず、「一民族の生産力がどれほど発展しているかを最も歴然と示すものは、分業の発展度である。それぞれの新しい生産力は、それがこれまでにすでに知られた生産力のたんに量的な拡張である……のでないかぎり、分業のひとつの新しい形成をもたらす[1)]」として、分業が生産力の成分および結果としてとらえられている。さらに、こうした生産力発達の指標としての分業の基本形態として、「農耕労働からの工業および商業労働の分離、およびそれとともに都市と地方の分離」[1)]が、つづいて「工業労働から商業労働の分離」[1)]があげられ、さらに「特定の諸労働に協力する諸個人のあいだ」[1)]に形成される分業および「いろいろな民族相互間の関係のうちにみられる」[1)]分業があげられている。しかし、マルクスは、単なる生産力発達の表現としての分業から一歩すすんで、つぎのような規定を与えている。「ちょうど労働の分割のさまざまな発展段階の数だけ所有のさまざまな形態がある。ということは、労働の分割のその都度々々の段階は労働の材料、用具および産物にかんしての諸個人相互間の間柄をも規定する。」[2)]すなわち、分業は、(1)それ自身生産力でありながら、(2)所有関係＝生産関係を直接規定するもの、として把握されているといえる。しかも、これだけではない。第1のものを生産力視点からの分業規定、第2のものを生産関係視点からの分

業規定とすれば、「ドイツ・イデオロギー」のなかにはいまひとつ社会的諸矛盾の根源としての（いわば疎外視点からの）分業概念が第3の規定として存在していることが明らかに指摘できる。分業概念と労働疎外との連関については、すでに「経済学・哲学手稿」においてつぎのようにのべられていた。「分業は、疎外の内部での労働の社会性の国民経済学的表現であり、……1つの実在的な類的活動としての人間的活動の、あるいは類的存在としての人間の活動としての人間的活動の疎外され外化された定立よりほかのなにものでもない[3]。」「分業の本質……〔は〕……類的活動としての人間的活動の疎外され外化された形態」であり、「分業と交換は、1つの類的な活動および本質的力としての、人間的な活動および本質的力の、目立って外化された表現」[4]である……等々。しかしここではまだ、分業が類的存在としての人間的活動の疎外された「形態」あるいは「表現」として理解され、疎外としてあらわれる諸矛盾の根拠としてはとらえられていない。すなわち、労働の自己疎外の論理によってブルジョア社会の諸矛盾（私的所有と労働との対立）とその克服の必然性を論理的に解明することを課題とした手稿においては、「労働の疎外、その外化を、1つの事実としてうけとり、そしてこの事実を分析した」[5]にとどまったのであり、「どのようにして人間は、彼の労働を外化し、疎外するにいたるのか？どのようにして、この疎外は人間の発展の本質のなかに根ざしているのか？」[5]という論題はあとにのこされたのである。「ドイツ・イデオロギー」における分業の第3規定においては、こののこされた問題に解答が与えられているのであって、そこでは、分業は、労働と労働生産物の不平等な配分、したがって所有の不平等、個別利害と共同利害の対立などの社会的諸矛盾の実在的原因として把握されるとともに、個々人が自己の生活行動範囲を限定されることによって類的本質をうばわれ、逆に類的本質そのものが個々人には無縁の外的力として独立し、個々人に対立するという階級社会の深い矛盾の根拠として規定されているのである。「諸個人はつねに自己から出発してきたし、つねに自己から出発する。彼らの諸関係は彼らの現実的生活過程の諸関係である。彼らの諸関係が自立して彼らに向かいあうということは、どこから起こるのだろうか？彼ら自身の生活の諸力が彼らを圧倒するものになるということは、どこから起こるのだろうか？

一言でいえば、分業であり、そしてそれの諸段階はそのときどきの生産力の発展に依存している。」[6]そして、マルクスが、共産主義社会の一般的本質としての「分業の廃棄」を結論したのも、まさにこの第3規定における分業概念に

かかわっているのである。

「ドイツ・イデオロギー」と「哲学の貧困」とのあいだのわずかの年月は、しかし、史的唯物論の形成という観点からみて決定的意味をもっている。というのは、すでにのべたように、前者において交通形態とか交通関係とか名づけられた社会的生産における人間の関係が、「生産諸関係」として範疇的に確定するのがこの時期に属するからである。これにともなって、分業概念にまといついていた生産関係的性格はほぼ払拭されている。「ドイツ・イデオロギー」においては、分業がまだ所有関係を直接規定するものとして、生産関係ととなりあわせの範疇として把握されており、ときには分業と私有とはおなじもののちがった表現であるとさえいわれていた[7]。ところが「哲学の貧困」（あるいはほぼ同時期の「賃労働と資本」）になると、生産過程における客体的条件なかんずく労働手段の役割にたいする認識が深まるとともに、生産手段をめぐる人々の社会的関係としての所有関係が独立の範疇として分離され、かくして所有関係を軸とする生産諸関係が範疇的に固定されるにいたるのである。それとともに、分業概念にたいする前述の第2規定（生産関係視点）の意義がうすれ、分業がもっぱら生産力範疇の内部で把握されることになるのであるが、こうした分業概念における変化の背景には、おそらく、近代的な機械制大工業の革命的役割にたいするマルクスの認識がこの時期にとくに深まったことが考えられるであろう。したがってまた、「哲学の貧困」においては、分業一般の廃棄の必然性が、もはやたんに論理的にのべられるのではなく、近代的工場制度の全発展がどのようにして現実に分業を廃棄しつつあるかが、（主として）ドクター・ユーアを援用しつつのべられることになったのである。（同時期にエンゲルスが、分業が機械によって現にくずされつつあることを指摘したことは、「共産主義の原理」からの引用によってすでに示したとおりである。）

かくして、マルクスにおける分業概念は、一方では生産力の内部に所属する範疇として、あるいはそれ自体独特の生産力として把握され、同時に他方では種々の社会的矛盾の根源として規定されることになったのであるが、このように両側面の統一として分業を把握する観点は「資本論」段階においても基本的に変わっていないといえる。

1）「ドイツ・イデオロギー」、前出、17～18ページ。
2）同、18ページ。
3）「経済学・哲学手稿」、前出、183ページ。
4）同、191ページ。
5）同、116ページ。

6）「ドイツ・イデオロギー」、前出、598ページ。
7）同、28ページ参照。

§　2　分業の二面性とその矛盾

上述の分業にたいする二面的把握が、分業の発生と発展の歴史的経過のうちに十分の根拠をもっていることはいうまでもないが、ここでは、とくに矛盾の発展としての分業の発達過程を概観してみよう。

人類社会発展の初期段階において、人間の労働が単一不可分のものであり、人間集団全体の肉体的、精神的力能が個々人のうちで統一されていたことは十分推論できるところである。原始人たちは、ただひとつの労働手段である「石器」をもって自らの所属する集団全体のプリミティブな欲求をみたすために、各種の（といってもあまり多くはない）労働種目を順次遂行したであろう。かれの労働活動のうちには、工業的労働も農業的労働もふくまれていたであろうし、かれ自身が動力源でもあり、全生産活動の直接的遂行と労働過程の統制の機能をかねそなえていたにちがいない。かれは、土器をつくり、住居を建て、狩りに出かけ、植物を栽培することさえできたであろう。要するに、原始人たちは、かれの生活の社会的母体たる血縁集団の欲求が何であり、どのようにしてそれを充足しうるかをよく知っており、現実にすべての生活手段をみずから調達したのであるが、こうした原始的労働にみられる活動の普遍性は、原始人たちの肉体的、精神的普遍性の土台となり、かれらの個性の調和的発達（とはいっても、原始的な生産と社会の未発展にふさわしい調和ではあるが）をうながすことになった。ここではすべての個人が一様に発達するであろうし、またこうした人間の一様な普遍性のために原始社会はきわめて緩まんにしか発達しないのであるが、しかし同時に、いっさいの社会的不平等を生みだす原因は排除されているのである。

労働の分割はまず、原始的採取経済のなかから牧畜経済（遊牧民）が分離されることによってはじまり、つづいて農業（農耕民）が分離された。「これがすなわち、労働の最初の大きな社会的分業である[7]」その結果、一方では労働生産力は増大するが、他方では原始人類にみられた活動の本源的普遍性は崩壊し、個々の人間の生活場面を大きく限定するさいしょの社会的分業があらわれた。社会的分業の発展は、労働生産性をひきあげ、剰余生産物の生産とその搾取の可能性をうみ出し、これを土台としてもはや物質的生産にはたずさわらない人間集団が分離され、この意味で社会的分業は階級と政治的国家の発生の物

質的基盤となった。「最初の大きな社会的分業から、二つの階級への最初の大きな社会の分裂が生じた。すなわち、主人と奴隷、搾取者と被搾取者」[8]とエンゲルスはのべている。労働の統制、裁判、科学、芸術などの人間の精神活動の全分野が支配階級によって独占されることになった。これによって分業は、社会的矛盾のうちでももっとも深刻な階級対立と結合するのであるが、この意味においてマルクスは「労働の分割は物質的労働と精神的労働の分割が現われてくる瞬間からはじめてほんとうに分割となる」[9]といったのである。この種の分業は、物質的生産内部の労働分割とくらべると、人間活動の社会的・政治的固定化という点で異質のものであり、いわば階級的固定性をもつものであり、階級支配の発展とともにこの固定性はいっそう強化されてゆく。

さいしょの階級社会である奴隷制社会ではさらに、農業からの手工業の分離という新しい大きな労働分割形態が発生し、全文明史をつらぬく都市と農村との対立の物質的土台となった。都市住民と農村住民との生産上の依存関係が発展し、これによって都市手工業と農業との双方の発展をうながしたが、同時にまた直接生産者（手工業職人や農民）の生産活動場面を地域的、部門的に固定し、一面化してしまった。その結果、「一方の人間をを偏狭な都市動物、他方の人間を偏狭な農村動物たらしめ」[10]、「都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを破壊」[11]してしまったのである。階級社会の発展とともに、都市が、産業（および商業）だけでなく政治と文化の中心となるにつれて、都市と農村との対立は精神労働と肉体労働との対立という側面をもつにいたる。マルクスが、「物質的労働と精神的労働という最大の分割は都市と地方の分離である」[12]とのべたのは、この意味であったと思われる。

農業、工業、運輸、商業のような大部門への社会的労働の分割をマルクスは一般的分業（Teiliung der Arbeit im allgemeinen）と名づけたが、社会的生産の発展につれて、これらの大部門はさらに種や亜種へ区分されるようになり、かくして特殊的分業（Teilung der Arbeit im besondren）があらわれる。とくに工業諸部門は、採取工業、製造工業、建設業などに分化し、製造工業はさらに、製鉄、機械製造、繊維などの業種に分れ、それぞれがさらに細分されてゆくが、この過程は農業的諸部門や流通諸部門でも基本的に変わるところはない。その結果、個々の労働者や労働者集団の活動範囲はいっそう限定され、生産者たちの人格的発達の一面性はいっそう促進される。

しかし、一般的分業や特殊的分業のもとでは、分業がまだ直接的生産過程の内部に滲透するまでに発展していないために、生産者の人格にたいする影響も

また徹底的なものではない。そこでは、生産的労働者の精神活動の大部分が奪われはするが、直接的労働過程に固有の精神的諸機能の最低限はなおかろうじて残されている。手工業者も農民も織匠も馬子も船頭もまだ自己の労働過程を統制し、管理し、あるときは自ら計画したり記帳したりさえするだろう。分業が直接生産者の人格そのものを徹底的に細分し、破壊するのは、いっそう発展した分業形態である個別的分業（Teilung der einzelnen）のもとである。「ある種の精神的肉体的不具化は、社会全体の分業からさえも不可分である。しかし、マニュファクチュア時代は、このような諸労働部門の社会的分割をさらにいっそう推し進め、他面ではその特有の分業によってはじめて個人をその生命の根源からとらえる……」[13] とマルクスはのべている。

個別的分業は、社会内分業（一般的、特殊的）とちがって、資本主義的協業を前提する。すなわち、同一労働過程への労働者の集中および集中によって出現する総労働の技術的細分、個々の労働者の部分労働者への転化—これがマニュファクチュア分業としてとらえられた個別的分業の主要な契機である。マニュファクチュア分業においては、「すでに社会に存在していた職業の自然発生的分化を作業場のなかで再生産して、これを組織的に極度にまで進める」[14] のであり、こうして一方では、部分労働者の巧妙、作業の連続性、道具の単純化および多様化を生み出すことによって、労働生産性を飛躍的に高め、他方では、労働者自身をひとつの細目機能に生涯的にしばりつけ、全体労働者のなかにおいてのみ生存しうる不具者（マニュファクチュア機構の部品）に転化してしまうのである。人格そのものを細分された個人は、もはやひとりでは何事もなしえず、何物も創造しえない。しかも、個別的分業は、直接の生産過程に固有の精神的、知的活動をほとんど無にひとしくすることによって、労働する人間の畸型化を完成するのである。

だが、労働者の精神的・肉体的不具化という点では、分業にもとづく協業（マニュファクチュア）も機械にもとづく協業（工場）よりはまだましであろう。工場制度の技術的基礎である機械体系（動力、伝動機、作業機）においては、すでに労働手段が労働主体にたいして独立化し、生産過程が労働者の個体的存在の外部に客観化される一方、客観化された生産技術工程自体が極端に細分され簡単化されてしまう。したがってここでは、労働者としての人間は、機械体系の運動にしたがってかんたんで無内容な動作をくりかえす機械の生きた（不正確な）付属品に転落するのである。「労働の均等化または水平化」[15] をもたらすだけでなく「労働を内容から解放する」[16] 機械および機械体系は、そ

の技術的本性からして分業法則に対立し、労働者の職業的専門化と両立しない。しかしまた、生産力としての分業を搾取の手段として利用する資本は、マニュファクチュア的分業を工場制度のもとで「体系的にもっといやな形で」[17]再生産し固定しようと努力する。工場内では、技術的にくつがえされた部分労働者たちの人為的分業にかわって「年令や性の自然的差異」[18]にもとづく分業の方が資本にとって重要な意味をもってくる。

大工業時代にはさらに、機械経営の発展が社会内の分業をマニュファクチュア時代とはくらべられないほど急速に発展させるし、また直接生産過程内部での精神労働と肉体労働との分離過程（この過程は、単純協業にはじまり、マニュファクチュアにおいて発展したものであるが）を、「大工業において、完結」[19]させるのである。したがって、分業法則にたいする資本主義的大工業の関係は、一方ではそれを原理的に廃棄し、他方では、事実として廃棄しないどころか発展させるという克服しがたい矛盾をともなうのである。大工業と分業との連関については、のちにくわしくふれる。

7）F・エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」、選集、第13巻、461ページ。
8）同、463ページ。
9）「ドイツ・イデオロギー」、前出、27ページ。
10）同、46ページ。
11）K・マルクス「資本論」、大月書店、国民文庫、第3分冊、320ページ。
12）「ドイツ・イデオロギー」、前出、46ページ。
13）「資本論」、前出、第3分冊、90ページ。
14）同、51～52ページ。
15）同、183ページ。
16）同、188ページ。
17）同、186ページ。
18）同、183ページ。
19）同、87ページ。

§3 協働（Zusammenwirkung）—生産力と生産関係とのエレメンタールな統一

前項で概観した分業の発展史からあきらかなように、分業（いっそう正確にいえば社会的分業）は、さしあたり、生産諸力発展の指標であると同時にそれ自体独特の生産力であり、分業の発展は社会的労働の生産性の上昇を結果する

のであるが、他面では、生産者たちの活動場面を一定の限界内にとじこめることによって逆に基本的生産力である人間の発達を一面化し、社会的生産諸力の発展を制限するという相矛盾する二側面の統一として把握することができる。マルクスにおける分業概念の推移のうちにみられるのも、分業概念を生産力範疇としてとらえつつ、その発展がもたらす人間の一面化・不具化のうちに分業の本質を見ようとする視点の確立であった。

しかし、分業を生産力として規定することは必ずしも自明のことではない。たとえば、生産力範疇としての分業を、たんに使用価値的富の多様性のうちに現出するかぎりでの社会的生産の内部組織として安易に理解するばあいがはなはだ多いし、こうした用語例はマルクスのうちにもみられる（たとえば、商品生産の存在条件として社会的分業をあげるばあいがそれである）。いずれにしても、生産力としての分業の独自性の明確な把握がないかぎり、この種の安易な理解にとどまるか、そうでなければたちまち分業を生産関係範疇の方へおしやることになりかねない（スヂェレフスキー、コマロフ・モスコヴィチにそうした傾向がみられる）。

もともと生産力と生産関係のあいだにはっきりした範疇的区別とともに、同一の基礎（＝労働主体における統一）が存在することはあらためていうまでもない。かつて高島善哉教授は、「生産力と生産関係との同一性の見地から出発して、生産力と生産関係との矛盾と対立を導き出すべきものである」[20] として、ここから「生産関係もまた生産力だ」[20] という結論に到達している。この観点からすれば、「人間が生産において互いに取り結ぶ関係」[20] をただちに生産関係と考え、しかもそれを生産関係＝階級関係と考えがちであるが、しかしそれは「まず第一には、労働関係一般として、分業（？—引用者）および協業の組織として抽象的に把握されなければならない」[20] ことになる、とされる。いいかえれば、「生産力から生産関係への論理的な発展の中間項として労働主体が生産において取り結ぶ関係、すなわち労働関係の範疇を入れる方がよい」[21] とされるのである。

社会的生産諸力は、物質的富の社会的生産における主体的契機と客体的契機との統一であり、ここで主体とは社会化された人間すなわち自然との闘争において協働する人間のことである。したがって、生産諸力のうちにははじめから社会的労働の一連の組織が内包されているのである。だから、物質的富の生産において相互に関係しあい、依存しあい、活動を交換する生産者たちの協働関係は、生産力の内部にありながら人間労働の本来的社会性を具現する実在的契

機であり、社会的生産関係の抽象的基礎であるといわなければならない。生産諸関係とは区別されるこのような抽象的生産関係、あるいは生産関係一般ともいえる生産力成分については、われわれは、すでに初期マルクスのうちに明確な典拠を見出すことができる。「ドイツ・イデオロギー」において、マルクスは、物的生産の諸契機を考察しつつ、つぎのようにのべている。「……労働における自己の生の生産にしても、生殖における他人の生の生産にしても、およそ生の生産なるものはとりもなおさずある二重の関係として——一面では自然的関係として、他面では社会的関係として—現われる。ここで社会的というのは、どのような条件のもとであれ、どのような仕方においてであれ、そしてどのような目的のためであれ、ともかく幾人かの諸個人の協働という意味である。したがって、ある特定の協働様式または社会的段階と結びついているということ、—そしてこの協働様式はそれ自体、一つの「生産力」である……。」[21] ここでいわれている協働（Zusammenwirkung）あるいは協働様式なるものが、のちに「資本論」においてしばしば社会的労働組織とか労働の社会的編成とかよばれているものと同一のカテゴリーであると考えることは、とくに議論を要しないと思われる。こうした社会的労働組織あるいは協働関係は、一方では生産諸力の客体的契機の発展水準によってその形態（様式）を規定されつつ、他方では生産諸関係の性格と形態を規定するのであるが、逆にまたそれは、生産過程の物質的・技術的条件の発展度を制約しつつ、所与の生産関係によって制約されることになる。だから、このような意味において、マルクスが、協働様式とか社会的労働組織とか名づけたものを、生産諸力と生産諸関係とのもっともエレメンタールな統一物であるとして把握しうるであろう。それにもかかわらず、協働関係＝社会的労働組織が、いぜんとして生産力範疇に属するのは、労働そのものが（どのように社会化されていようと）まさに客体（自然）にたいする主体（人間）の能動的関係以外のものを意味しないからである。「生産力の全体性もしくは総合性」[22] といわれるゆえんはこの点にあるのであって、これをいいかえれば、社会的生産における主体と客体との主体における統一が、社会化され結合された労働のうちに存するということなのである。「生産力の主体的契機における複雑化の過程を歴史的・論理的に追及すること」[22] によって、「生産関係の内的契機」[22] をさぐり出すことができるのは、この複雑化した（社会化された）主体＝社会的労働組織なるものがまさに、生産力に内属しながら生産関係の主体的契機でもあるという、それ自体が社会的生産においてしめる独特の地位によるのである。

以上のことからすぐさまいえることは、社会的分業のうちにあらわれる独特の人間関係は、社会的労働過程一般に固有の人々の協働関係のひとつの歴史的フォルムであるということである。社会的分業がひとつの協働様式であるとすれば、分業自体が生産力の成分であると同時に、生産力内部における人々の社会的関係でもあるということは説明を要しない。だがこのような性格は、さしあたりまず協働関係一般のそれであって分業の本質をなすものではない。分業もまた独特の協働様式であるかぎりでこうした性格を具有し、それを概念のうちに内包している。しかし、分業を分業たらしめるもの—分業の本質的契機—は何かといえば、前項で歴史的に要約した分業概念にのみ固有のいまひとつの側面、すなわち、人間をしてその活動分野を限定せしめ、その精神的・肉体的畸型化をもたらす社会的労働の職業的分化＝専門化こそがそれであるといわなければならないであろう。この意味において分業は、「疎外の内部での労働の社会性の国民経済学的表現」[23] なのである。

ここではなお2つの点を指摘しておこう。

第1は、協働様式を社会的分業として固定する技術的基盤は何かということである。いうまでもないことであるが、数千年にわたって自生的に発展し、多様な形態のもとに発現する分業法則の技術的基礎を具体的に規定することは無駄なことであろうし、おそらくは不可能であろう。原始的農具も近代的機械体系も、いずれもそれなりに労働分割を技術的に制約しているからである。しかし、ごく一般的には、つぎのように考えてもおそらくまちがいではあるまい。すなわち社会的労働の分割、したがって生産的労働者の職業的分化＝専門化が生ずるのは、労働がもっぱら人間の肉体的エネルギーと手の作業によって遂行されるような発展段階であり、したがって手労働に照応する労働手段つまり「道具」こそが分業一般の技術的基礎であるということである。このことは、道具としての道具が、マニュファクチュア経営において完全に発達し、典型的分業としての個別的分業の技術的基礎となったことがはっきり示している。機械体系は、道具を自らの成分（作業機）として吸収し、その結果「手工業的活動を廃棄する」[24] のであるが、その発展過程で手労働による補足を必要とするかぎりで、いぜんとして個別的分業を完全に廃棄しえないのである。機械化された近代的工業が、一方ではマニュファクチュア的分業体系を技術的に廃棄しながら、他面ではそれを新たな形態のもとにたえず再生産しうるのは、そのためである。

第2に、マニュファクチュアにおいて極点を見いだす典型的分業としての個

別的分業は、社会的労働一般に固有の協働様式のひとつであると同時に、さらに協業（Kooperation）の特殊形態でもあるということである。マルクスは、協業を、「同じ生産過程で、または同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの人々が計画的にいっしょに協力して労働するという労働の形態」[25]と規定している。だから、協業の独自性は、生産者たちの直接の協働関係という点にあるといってよく、人間労働に内在する本来的社会性のいわば直接的顕現としての意味を与えられている。しかし、このような一般的に把握された協業は、たしかに「種族または共同体の臍帯」にもとづいても発生しうるとはいえ、マルクスがこれを、資本主義の独自の産物と考え、「資本主義的生産様式の基本形態」[26]と規定したことを看過すべきではない。だから協業は、マルクスによってしばしば「社会的労働組織」[27]とよばれた協働関係の直接的顕現であると同時に、他面、資本のもとに包摂された生産過程の内部では、マニュ経営や工場制度の一般的基礎（基本形態）でもあると考えられる。いいかえれば、単純協業としての協業は、分業労働や機械化された工場労働の組織形態とならぶ特殊形態であるが、協業一般としての協業は、資本主義的労働組織の抽象的基礎である。マルクスが単純協業あるいは協業一般にひきつづいて叙述したのは（「資本論」第1巻、第12章）協業にもとづく分業ではなく「分業にもとづく協業」[28]（傍点引用者）なのである。分業は協業の否定であるどころか、単純協業にもとづいて形成されると同時に、分業からえられる「利点の多くは協業の一般的本質から生ずる」[29]ものであり、分業そのものが「協業のひとつの特殊な種類」[29]なのである。機械体系もまた分業を「技術的に」廃棄するだけであって、協業と対立するものではなく、むしろ協業を完成するものであることは、あとでくわしく論ずる。

20）高島善哉、「生産力の構造」、経済評論、1949年、8月号、11～15ページ。
21）「ドイツ・イデオロギー」、前出、25ページ。
22）「生産力の構造」、前出、10～11ページ。
23）「経済学・哲学手稿」、前出、183ページ。
24）「資本論」、前出、第3分冊、100ページ。
25）同、29ページ。
26）同、45ページ。
27）同、78、92ページ参照。
28）同、46ページ。
29）同、50ページ。

§ 4 生産分割と労働分割

前項でのべたことを、別の側面から論じてみよう。

分業とは、Division of Labour であり、Arbeitsteilung, Разделение труда 等々である。したがって、文字どおりとるならば、社会的生産の主体的契機にかかわる分割であり、労働する人間の社会的分割である。ところが、従来、分業という概念のもとに理解されたのは、必ずしも労働（あるいは社会的労働）の分割だけではなく、生産の客体の側における分割をもふくむところの社会的生産の多岐にわたる部門編成でもあることがしばしばであったといえる。

労働分割と生産分割との混同の由来をいま一歩つっこんで考えてみると、そもそも「生産」と「労働」という基本的概念における区別が必ずしも厳密に意識的に保持されていないばあいが多いことがわかる。生産と労働とを絶対的に区別し対立させることはもちろんできることではない。物質的富の生産にはつねに主体としての人間(したがって人間の労働)が前提されているし、労働はつねに生産的労働として、物質的富の生産活動の外部にはありえないからである。それにもかかわらず、物質的富の生産には主体と同時に客体もまた参加するという単純な事実のうちにすでに、生産と労働との明白な概念的区別が生ずる。経済的「価値」の源泉は労働であり、労働だけであるといわなければならない、しかし「労働は、それによって生産される使用価値の、素材的富のただひとつの源泉なのではない。……労働は素材的富の父であり、土地はその母である。」[30] この思想をもっと一般化していうならば、物質的生産過程に必要な契機として参加するのは労働する人間だけでなく、本源的には自然（あるいは自然力）もまた生身で参加するということである。生産過程の発展につれていっそう多くの蓄積された過去の労働が生産手段として（したがって労働する人間にとってはやはり一種の自然力として）参加するということも、富の生産が労働だけによって実現されるものでないことの実証である。だから、生産と労働との概念的区別がもっとも明りょうに現実化するのは、生産過程がより多く自然力によって支持されなければならないような生産部面において、すなわち原生産諸部門（農業、林業、畜産、養漁業など）である。これらの諸部門では、生産過程の内部に自然過程が介入し、労働過程と自然過程とが絡みあうのがみられる。主要な原生産部門である農業においては、人間労働力の直接的投入がもっぱら播種、施肥、収穫の三つのモメントにかぎられ、農作物育成に要する期間の大部分は、自然力の作用にまかされる。だから、原生産諸部門においては、生産時間と労働時間との量的差異が工業的諸部門にくらべてずっと大きい

のである。ぶどう酒醸造におけるぶどう液の醱酵時間、製陶業における製品の乾燥時間、靴型製造における木材乾燥時間、造林業における樹木の成育時間—これらはすべて生産時間の成分ではあるが労働時間ではなく、したがってここには生産過程と労働時間とのあいだの時間的および空間時分離が事実上存在しているのである[31]。

生産過程が自然科学によって分解され、動力的基礎においても、技術工程においても人間労働力との直接的結合から解放される機械制大工業の時代には、原生産部面にみられた生産過程と労働過程との時間的・空間的分離がいっそう大規模にあらわれる。自動機械体系が発展するにつれて、機械の作動時間（機械時間）と労働時間との量的差異はいっそう大きくなる。労働力の直接的介入から独立した原料の化学的反応の形で進行する連続的技術工程を特徴とする化学工業は、生産過程オートメ化にもっともふさわしい部門であるが、一般に生産過程の全面的オート化は「原料の加工に必要なすべての運動を人間の助力なしに行ない、ただ人間の付き添いを必要とするだけになる」[32]ような機械化生産の発展段階であり、したがってここにおいては生産と労働との決定的分離が生ずるのである。

もちろん、原生産部門における生産と労働との分離と、機械化・オートメ化のもとで発生する生産と労働との分離との類似は外面的なものである。前者は、社会的生産の未発展を意味するのであって、ここでは生産時間と労働時間との差の縮小こそが労働生産性上昇の指標とみなされよう。これにたいして後者のばあいには、生産過程において生労働よりは過去労働が、人間よりは労働手段が優勢となることに由来する生産と労働との分離が問題となっているのであり、したがってそこでは生産時間と労働時間との差異の増大こそが生産力上昇の指標となるのである。

さて以上のべたような意味における生産と労働との概念上の区別をきびしく保持するかぎり、そこからすぐさま、生産過程と労働過程、生産組織と労働組織、生産関係と労働関係などの概念上の区別に到達せざるをえないことは明らかである。マルクスはしばしば「生産有機体 Produktive Organismus」[33] というタームを用いて社会的労働組織とはことなる概念を与えていたようにみえる。ここから、生産有機体の成分でありながらそれとは区別される労働有機体というタームによって社会的労働組織を表現することができるであろう。したがってまた、生産有機体の社会的分割にたいしては労働有機体の社会的分割が対応するのであって、この後者こそはわれわれが前項において社会的労

働組織（協働）の独特の歴史的形態としてのべた分業に相当するものである。マルクスにおいては、労働分割と生産分割とを同一のものとして扱っているばあいがあり、それはそれで一定の歴史的根拠をもっていることはのちにふれるが、しかし、マニュファクチュアと大工業との決定的差異をのべるばあいには、両者の概念上の区別を厳密に保持していたこともまた明らかである。かれは、特殊な労働有機体としてのマニュファクチュア独特の「主観的な分割原理」[34]にたいして、「機械による生産にとっては、……総過程が客観的に、それ自体として考察され、それを構成する諸段階に分解される」[34]とのべている。また、分業の諸形態を分類したつぎの一句のなかではこの区別がとくに強調されており、分業の名に値するものが生産分割とはことなるところの「労働分割」であるという認識がはっきりよみとれるのである。すなわち、「労働そのものだけを眼中におくならば、農業、工業というような大きな諸部門への社会的生産の分割を一般的分業、これらの生産部門の種や亜種への区分を特殊的分業、そしてひとつの作業場の内部の分業を個別的分業と呼ぶことができる」[35]というのがそれである。かくして分業概念は、「社会的生産の分割」を「労働そのもの」の視点から把握するばあいにはじめてえられるのであり、したがって分業（労働分割）は生産分割の成分ではあるがそれとははっきり区別されるものであるといわなければならない。

30）「資本論」、前出、第1分冊、81ページ。
31）同、前出、第6分冊（第2巻、第13章）参照。
32）同、前出、第3分冊、117ページ。
33）たとえば、「資本論」、前出、第3分冊、125ページ参照。
34）同、115ページ。
35）同、70ページ。

§　5　分業概念における混乱の歴史的根拠

従来、分業あるいは社会的分業という用語がはなはだ粗雑にあつかわれてきたことは、多分だれも否定しないだろう。「粗雑に」というのは、分業概念のもとにはっきりした体系的内容を理解せず、ごく大ざっぱな常識的理解から出発して、あるときは生産力的なものを、あるときは生産関係的なものを、またあるときはいわゆる「労働配分法則」と同じものを、またたいていはこれらの表象と結びついた社会的生産の部門編成を、それぞれ分業だと称するのであ

る。こうして、多面的概念としての分業が表象されるだけで、分業の本質的内容が見失われてしまうのである[36]。

こうした混乱の根がある程度マルクスのうちにあることは否定できない。というのは、マルクス自身、マニュファクチュア分業において極点（典型）を見出すところの人間活動の職業的固定化のうちに分業一般の本質を認識しながら、他方では、「社会的分業は商品生産の存在条件である」[48]という意味での分業概念をさいごまで保持しているからである。このばあいには、分業の生産力的側面が問題になっていることは明らかであるが、しかし、生産力内部における人間労働の社会的連関（協働関係）そのものではなく、使用価値的富の多様性のうちにあらわれるかぎりでの社会的生産の分割を意味している。いいかえれば、社会的生産が多様な欲望に応じて無数の部門、亜部門のうちに組織され、相互に依存する生産有機体として体系的に編成されている状態をさしているのである。しかし、こうした社会的生産の分割と統一の上に成立する生産有機体の存在は、多少とも発展した欲望をもつ社会が存立するための不可欠の条件であり、商品生産社会もまた例外ではない。問題は、こうした生産の社会的分割が労働の社会的分割をともない、しかも分割され専門化された個々の労働種目が社会的に分離され固定されるばあいにはじめて、個々人の労働の社会的性格が労働の抽象的属性を通じて生産物価値のうちに実体化する条件があらわれるという点にある。だからこそ、商品生産の社会経済的存在条件は、生産の私的性格（＝生産手段の私有）であるといわなければならないのである。商品生産にたいする分業の関係は、それが一方では社会的生産分割の成分をなすかぎりで商品生産の生産力的基礎であると同時に、他方では、分業が私的生産諸関係を直接生み出し、また分業によってのみ私的生産が発展させられる、という意味で二重である。インドの古代的農村共同体においては労働の職業的分割が商品生産と結合していないというマルクスの例示（たとえば「資本論」第1巻、第1分冊、79ページあるいは第3分冊374～375ページ参照）は、そこではただ個々人の労働が社会的に分離し対立させられる社会経済的条件（私的所有の諸関係）が欠けているか未発展であることを示すにすぎず、なおまた古代的共同体の内部では、社会的分業自体が未発展であって、分業の全発展史において例外的なものであり、分業の本格的発展と古代的共同体とが両立しえないものであることを意味しているにすぎない。

これと関連していまひとつの問題点をあげるならば、マルクスがマニュファクチュア内の分業と社会内の分業（Teilung der Arbert innerhalb der Manu-

faktur und Teilung der Arbeit innerhald der Gesellshaft) とを区別しつつ、後者をしばしば社会的分業 (gesellshaftlichen Teilung der Arbeit) といいかえて、あたかも前者が社会的分業ではないかのような印象を与えかねないことである。ここから、個別的分業を技術的分業としてとらえ、社会内分業（一般的、特殊的）に対置する見解がしばしばあらわれることになる。マニュフアクチュア経営における部分労働者の職業的固定化が、社会内分業とちがって生産技術的条件の変化に直接規定されているとしても、それが労働の社会的分割であることは否定しうべくもない。マニュファクチュア分業もまた社会的分業であるからこそ、その形成の第1の出発点は社会内部の分業の存在でありえたし、またマニュファクチュア分業の発展そのものが社会内の分業をいっそう拡張し深めることになるのである。分業概念のもとに理解しなければならないのは、くりかえしのべたように、作業場内であれ社会内であれ、労働する生産主体の活動場面を限定し、それによって人間の職業的固着性と一面的畸型化を生み出すような労働分割以外の何ものでもなく、社会的生産の分割＝生産の専門化）とはけっして同一物ではない。

しかし、このような分業概念にまつわる不明確さ、とくに生産分割（＝生産専門化）と労働分割（＝労働専門化）との混同には、それなりの歴史的根拠があることを指摘する必要がある。というのは、分業なるものが、人類史上、労働がもっともプリミティブな様式でおこなわれていた時代以来、長い年月のあいだに（おそらく数千年にわたって）自然発生的に生れ、ひろがり、深まってきたものであるからには、それは必然的に生産発展の（唯一のではないが）主要なテコたらざるをえなかったという事情がそれである。すなわち、多様な使用価値的富を創出するための生産の分割＝専門化が、それ自体として意識的におこなわれずに、人間労働の自生的な（ときには意識的な）分割をとおしてしか達成されなかったという事情である。社会的生産における客体的条件の貧弱さ、逆にいえば、生産活動における生きた労働（労働力）の決定的優勢という事情が、労働の社会的分割したがって労働する人間自体の「分割」を通じてしか生産活動の多様化を実現させなかった根拠となっていたのであるが、こうした労働分割と生産専門化とのうらはらになった密接な連関は、マニュファクチュア経営における部分労働者への道具の適応という形で眼にみえて顕在化してくる。「マニュファクチュアにおける分業を正しく理解するためには、つぎの諸点をしっかりとらえておくことが重要である。まず第1に、生産過程をその特殊な諸段階に分解することは、このばあいには、1つの手工業的活動を種々

の部分作業に分解することとまったく一致する」[49]とマルクスはのべている。のちにのべるように、大工業においては、労働分割と生産分割とのこうした事実上の一致はなくなる。この点を看過して、社会的分業と生産専門化との事実上の一致を概念の一致としてあつかうとき、両者の混同が生ずるのである。[50]しかしまた、社会的生産発展の特定段階では、労働分割と生産分割とが事実上一致していたことから(このことは多分、手労働に立脚する生産の全時代にあてはめることができると考えられるが)、分業における労働の（あるいは労働する人間の）職業的専門化という側面が分業概念の本質的契機として認識されず、分業そのものの歴史的・経過的性格にたいする鈍感が支配したのもある程度やむをえなかったともいえる。分業の歴史的性格というばあい、ふつう念頭におかれているのは、分業の発現形態が歴史的に変化するということであって、分業自体の歴史的性格、すなわちその発生、発展とともに、その必然的終末をも予想するような経過的性格としては理解されていない傾きがあった。

すでにくりかえしのべたように、生産と労働との概念的区別からして、生産分割あるいは生産専門化と分業（＝労働分割＝労働専門化）とは同一物ではない。生産専門化のうちには社会的労働の質的多様性、生産力内部における労働の（労働者の）社会的連関が表現されているが、しかしそれだけが表現されているのではなく、自然過程の多様性や生産過程の技術的分化もまた表現されている。ところが、分業とは個々の人間や人間集団のあいだに形成される活動交換の関係が職業的専門化の体系として骨化したものなのである。このふたつのものは区別されなければならないし、事実上の一致を語りうるとしても、それは、労働が社会的にも技術的にも未熟な様式で遂行されなければならなかった時代、したがって人間自体を特定の地域、特定の部門、特定の職種にしばりつけることによってしか労働の社会性を現実化し、生産を社会化し、労働生産性を上昇させることができなかった人類史の一時代にのみ妥当するのである。この一致は、「生産過程の真に科学的な分解」[52]によって人間労働の物理的力能のみならず精神的・知的力能をも生産手段のうちに移すことを可能にする大工業の時代に粉砕される。

36）ソ連邦における経済学者や哲学者（社会学者）の分業の本質にたいする見解は生産様式の内部における分業の位置づけからみておよそ5つのグループに類別できる。

第1は、分業を生産関係概念とみる見解（Л. ベリ[37]、Г. スミルノフ[38]など）

第2は、分業をそれ自体もっぱら特殊な生産関係として把握しようとする見解（И.

スヂェレフスキー[39]、Б. コマロフ[40]、Б. モスコヴィチ[40]など)

第3は、分業をもっぱら生産力の成分とみる見解（A. ノートキン[41]、E. エフレモヴァ[42]など)

第4は、分業を生産力の形態とみる見解 (И. シゴフ[43]、B. コルニエンコ[44]など)

第5は、分業を生産関係の形態とみる見解（Я. クロンロード[45]ほか)

なお、分業法則と労働配分法則とを混同する例としては、A. クルイレフ[46]、И. スヂェレフスキー[47]をあげることができる。

37) И. Берри, Специализация и кооперирование в промышленности СССР, 1954, стр. 12.

38) Г. Смирнов, Разделение труда и обмен деятельностью в производстве, Вопросы Философии, No. 5, 1958, стр. 22～30.

39) И. Судеревский, Проблемы разделения труда, 1963, стр. 20.

40) В. Комаров, В. Москович, Об общественном разделение труда как экномической катетории, Сб. Проблемы политической экономии социализма, 1961, стр. 146.

41) А. ноткин, Материально-производственная база социализма, 1954, стр. 84.

42) Е. Ефремова, Место общественного разделения труда, его специализация и кооперирование в способе производства, Вестник Московского университета, No. 3, 1960.

43) И. Сигов, К вопросу о сущности разделения труда и его месте в системе общественного производства, Научные труды Ленинградското института точной механики и оптики, вып No. 52, 1961, срт. 47.

44) В. Корниенко, Общественное разделение труда как форма производительных сил социализма, Научные труды Ленинградского института точной механики и оптики, вып. No. 52, 1961, стр. 7.

45) Я. Кронрод' Общественный продукт и его структура при социализме, 1958, стр. 28.

46) А. Курылев, Всестороннее развитие личности при коммунизме, Вопросы философии, No. 10, 1961.

47) И. Судеревский, Проблемы разделения труда, 1963, стр. 11.

48) 「資本論」、前出、第1分冊、79ページ。

49) 同、第3分冊、50ページ。

50) 社会的分業と生産専門化との概念上の区別については、C. ストルミリンや B. コルニエンコも指摘しているが、両者を混同する傾向の由来をはっきり指摘した例としては、Д. カイダロフ[51]をあげることができる。

51) См. Д. Кайдалов, Разделение труда в настоящем и будущем, Вопросы экономики, No. 9, 1961, стр. 43.

52) 「資本論」、前出、第3分冊、50ページ。

§ 6 要　　約

分業の概念規定をめぐって以上にのべたことを、いくつかの点にまとめておこう。

第1，社会的分業（分業はつねに社会的分業である）は、生産諸力の内部で生産力と生産関係とのエレメンタールな統一を形成する協働関係（社会的労働組織、労働有機体）の独特の歴史的形態であり、人間労働の本来的社会性の特殊な（疎外された）形態である。

第2、この特殊性の本質は、人間労働の社会的分割、個人や社会集団の活動場面の限定のうちにあり、具体的には社会的労働の専門化、社会成員の職業的分化のうちにあらわれる。

第3、したがって、全体としての分業概念は、生産諸力発展の一定の表現であり、それ自体独自の生産力であると同時に、社会的生産力の主体的契機たる人間労働の統一性をうちこわし、人間自体の畸型的発達と職業白痴を生み出すという相矛盾する二側面の統一であるが、この統一の基礎は後者にある。

第4、社会的分業（労働の社会的分割）は、生産の専門化（生産の社会的分割）の不可欠の成分ではあるが、それと同じものではない。両者の一致は、社会的生産発展の特定段階にのみ妥当し、機械制大工業によって技術的に廃棄される。

第5、以上の意味において、マニュファクチュ分業こそが社会的分業の「典型的姿態」（マルクス）である。

〔未　完〕